鉄血の狐

ロア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鉄血の狐

【Ｎコード】
Ｎ８９００Ｚ

【作者名】
ロア

【あらすじ】
大好きな人がいた、今は許せない人がいる――幼馴染の命を奪った相手ともみ合いになり、真冬の夜に橋から転落した北村純。しかし次の瞬間には、人間ではなく狐の獣人の体に宿されて異世界に召喚されていた。魔法や魔物が存在する産業革命後の激動の近代ヨーロッパに似た異世界で、時代と世界の波に翻弄されながらも純は生きる。

プロローグ

大好きな人がいた、今は許せない人がいる――彼はその許せない、許したくない相手に声をかけた。

「……赤松吉宏」

赤松吉宏と呼ばれた男は、背後からいきなりフルネームで呼び捨てにされ、怪訝そうに振り返る。

振り返った先には、まったく見覚えの無い若い男が立っていた。眼鏡をかけた、日本のどこにでも溢れている凡庸そうな青年。

「誰だよ、お前……何の用だ？」

赤松は露骨に不審そうな表情を浮かべたまま、青年を上から下へと眺めた。改めて見ても、紺色のスーツを着た普通の青年だ。就職活動中の大学生か、社会人新米にしか見えない。

青年は髪を派手な金色に染め、耳にはピアスをつけて、一般人が想像するであろう典型的な不良、もしくはそれに類する容貌の赤松に睨まれても、顔色ひとつ変えなかった。普通ならば、怯えるなりなんなり、何らかの反応を示してもいいはずなのに。

相手の様子を完全に無視して、青年は静かに口を開き、彼の幼馴染の名前を口にした。

赤松の反応はわかりやすかった。驚き、そして硬直している。

「そうだよ、忘れてるはずがないよね。君が殺した人の名前だから」

青年は表情をまったく変えないまま、そう言った。赤松の背筋に

震えが走ったのは、冬の海風に吹きつけられただけではなく、その言葉に含まれた冷たさのせいだ。

「だ、誰だお前……どうしてそんなこと知ってるんだよ、畜生」

「別にそんなことはどうでもいいよ、ただ君と話がしたかったんだ」

赤松は目の前にいる青年が狂っているのではないかと思い、何か助けは無いかと周囲を見渡した。

真冬の夜の、河口に架かる大きな橋の上。歩道には電灯が明るく灯っているが、周囲に人影はまったくない。二車線の道路上は、時折車が通り過ぎていくが、歩道にいる二人には目もくれない。

相変わらず無表情の青年は、赤松の助けを求めるような視線の揺れがとまるのを待ち、それから続けた。

「君が殺した彼女は、僕の幼馴染だよ。それで本当に反省しているかどうか、話を聞きたくてね」

赤松は何も答えられなかった。ただ自分がはずみで殺してしまった相手の、幼馴染だと名乗る相手の言うことを聞く。

「少年法っていいなぁ、彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、君は五年ちょっとで塀の中からこうして出て来てるわけだし」

そんな言葉がすらすらと青年の口から出て来る。赤松の頭にその言葉が入っていくと同時に、猛烈な怒りがわき上がって来た。

「うるせぇ、てめーにそんなことを言われる筋合いはねぇよ！」

陳腐な台詞とともに、相手の襟元を掴んだ。青年はされるがままだ。

「俺はな、もう罪を償ったんだよ！もう誰からも非難されるいわれはねぇ！わかったかこの馬鹿野郎！」

飛び散る唾と怒声を顔に浴びながら、青年は良心の呵責も何もあったものではないその叫びに、一言だけ応じた。

「……よかった」

直後、赤松は脇腹に走った痛みに仰け反った。まるで火傷をした瞬間のような、猛烈な痛み。

赤松が視線を下げて痛みの根源を見ると、そこには青年の右手と、黒いものが見えた。

「て、てめっ……！」

黒いものがナイフの柄で、刃は深く自分の脇腹に食い込んでいることを理解した瞬間、赤松は無我夢中で青年を押していた。必死で青年を押し離して、ナイフを抜こうとする。

電灯の灯りの下で、二人はもみ合う。押された青年の腰が橋の欄干にぶつかり、そして呆気なくそれを越えた。青年は、両手で赤松を掴んで放さなかった。

そこからは、ただ単純に重力に従うだけだった。橋の欄干を乗り越えた二人の体は、冷たい真冬の水面へと落ちていった。

遠のいていく橋の上の灯りを見ながら、彼はこれで本当によかっ

たのだろうかと自問自答していた――答えを出す前に、彼の意識は闇に沈んだ。

北村純（きたむらじゅん）が意識を取り戻して最初に考えたのは、自分は生きているのか、そしてここはどこなのかということだった。

純の目には、ここがどこかの地下室のように見える。煉瓦の天井と床、そして壁。薄暗くてよくわからないが、湿って陰気な空気はそこが地下室だと教えてくれているような気がした。

あの赤松にナイフを刺してもみ合いになり、真冬の河口へと転落したことまでの記憶はある。しかし、そこからこの目の前の状況へとまったく繋がらないので、とにかく純は混乱した。

「……！？」

今更ながら純は、自分が身動きひとつ出来ないことに気がついた。指一本動かせない。それどころか、声すら出すことができなかった。

視点の高さや向きから、自分が立った姿勢でいることだけはわかったが、それがどうしたという話だ。

正真正銘の金縛りに自分が遭っていることに気づいた途端、パニックの波に巻き込まれた。必死で動こうとすることばかりに意識が向き、まともな思考などあっという間に吹き飛んだ。

純が無駄な努力を重ねている間に、変化が起きた。壁際のランプのようなものからの灯りの陰で、何かが動いたからだった。純の視線がそこに釘づけになる。

「遂にやった……私は召喚に成功した」

しわがれた声が、純の耳に届いた。闇の一部が動いたと思ったら、そこから黒いローブを着込んだ相手が姿を現したのだ。
もし純に声を出すことが出来れば、きっと絶叫していたに違いない。純は金縛りという状況下で、相手のことを幽霊か何かとしか考えることができなかった。

「これは狐……？」

ようやく見えた相手の顔を見て、純は息をのんだ。浅黒い肌を持った女だ。しわが多く見えるから、年寄りだろうか。
召喚とか狐とか、意味のわからないことを呟いている相手が自分の近寄って来るのを見て、純は逃げ出そうと必死で手足を動かそうとするが、どうにもならない。
謎のローブを着た女が、純の眼前にまでやって来て、立ち止まる。

「でもこれからじっくりと調べていけば……まずは契約を」

やはり意味不明なことを呟いている相手がローブの内懐へと手をやり、そこから出て来たときには、その手には短剣が握られていた。ランプの薄明かりの下で、刃が鈍く光った。

殺される――純の中で、その思いだけが膨らんだ。得体の知れない女が刃物を手に迫ってきている、純としては殺されるとしか思えない。
こうなる前には、自分が相手にナイフを突き刺していたことなど、純の頭からは見事に欠落していた。

「や……めろ、近寄るなあぁ！」

純の口から声が迸り、次の瞬間には女が吹き飛んだ。見えない何かに腹を殴られたかのように、体を折り曲げて、本当に後ろへと勢いよく吹っ飛んだのだ。

「そんな、術をかけたのにっ……！？」

煉瓦の壁に叩きつけられた女は咳き込んだ後、信じられないと言わんばかりの様子でもらした。手近なランプがいつの間にか消え、さらに暗くなっている。

純にも何が起こったのかさっぱりわからない、声は出せたが相変わらず体は動かせないままだ。

「こうなったら多少傷つけて、大人しくさせてからでも」

自身に言い聞かせるように呟きながら、ふらりと女が立ち上がる。殺意というものが立ち昇っているように感じられて、純は恐怖のあまり頭がどうにかなってしまいそうだった。

落とした短剣を拾い上げ、再び女がこちらへと迫った瞬間――何かを壊すような激しい物音がその場に響き渡り、女が背後の闇へと振り返る。

「どうしてここに……あがっ！？」

女の言葉が、そこで途切れた。純の耳が次にとらえたのは、何か大量の水が床に落ちたような、重く湿った音。純は嫌な予感しかしない。

女がまた振り返って、自分へと両腕を突き出して、ふらつきながら近寄って来た。まるで映画のゾンビのような動きだった。

純は自分が悪趣味なホラー映画の被害者役にされていると思い、これが夢か何かであって欲しいと切実に願った。目を閉じればいいと思ったが、それすら出来なかった。

そして純は見た。女のローブの肩から脇腹にかけてがばっさりと裂かれ、その下の皮膚も同様で、どす黒い血が足元へと流れ出ているという現実を。

あまりの光景にもはや声すら出なくなっている純の目の前で、女の口が動き、それから一気に全身が燃え上がった。

人が燃えている、それを認識した瞬間、純は本当に狂いそうになった。

燃えながら恨めしそうに両腕を突き出したまま、女が自分に近づいて来る——純は自分が何かを声の限り叫んだ気がしたが、目の前が真っ暗になってそれ以上は何もわからなくなった。

プロローグ（後書き）

こういう場で小説を公開するのは初めてなので、いろいろと至らないところだらけですが、これからよろしくお願いします。

ご意見やご感想をお待ちしています。

異世界召喚

意識を取り戻してから目を開けるまでが、とにかく怖かった。またあんなリアルで残虐な光景を見せつけられたら、今度こそ発狂してしまうと、本気で信じたからだった。

まずは手足が動くかどうかを確かめた。上に布か何かがかぶせられている感覚はあったが、普通に動いた。そして首も動かすことができた。どうやら横になっているようだ。

自分が金縛りに遭っていないことを確認してから、純は恐る恐る目を開けた。最初に見えたのは、木の板で構成された天井だった。地下室のあの陰気な臭いもこもっていない。

やはりびくびくとした動作で毛布をかけられていた上半身を起こし、周りを見た。それでやっと、純はある程度落ち着くことができた。

純が寝ていたのはベッドの上で、地下室などではない普通の部屋の中に自分がいることを知ったからだった。

純がいるのは、お洒落でレトロな感じのする部屋だった。窓から射し込んでいる陽光が、とても暖かい。

天井と同じく床は木製だったが、壁は明るい白の煉瓦でつくられている。あまり大きくない部屋で、家具といえば純が寝ていたベッドの隣に小さな机と椅子、それから壁際に棚が二つ並んでいるだけだ。

もちろん一体どうしてこんな部屋にいるのだろうという疑念はあったが、なにしろついさっきまでかどうかは知らないが、とにかく意識を取り戻す前には死ぬような恐ろしい目に遭ったのだ。

それを考えれば、目の前の部屋のことなど、どうということはな

い。

とはいえ、やはりここがどこなのか気になりはじめたところで、部屋の入口のドアが開いた。緊張が高まり、純はドアへと警戒する視線を向けた。

「よかった、気がついたんですね」

入って来たのは、優しそうな若い男の人だった。優しそうというのは、全身を見ての感想だ。

背は高くも低くもなく、すらりとした体をゆったりとした紺色の着物で包んでいた。前に朝のドラマで見た、昭和時代の落ち着いた大人そのものだった。

あの狂った女はローブに浅黒い肌というとんでも具合だったが、多少古い感じがしても目の前の男性は、日本人にしか見えない。

それに何より、穏やかな表情を浮かべた相手と話せるのは、今の自分にとって願っても無いことだと思えたのだった。

「あ、はい……あの、何かお世話になっているようで、ありがとうございます」

「いえいえ、気にしなくても大丈夫ですよ。そちらこそ大変な目に遭ったようですし」

ベッドの上でぺこりと頭を下げた純に対して、男の人は手を振り微笑しながら答える。

そのまま歩いて来ると、ベッドの隣の机の横に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「そうなんです、まるで意味がわからなくて……ここはどこですか、あなたは？」

とりあえず相手はなんとなく年長者のように感じたので、丁寧な応対をするように心がけて尋ねた。

「まあ、まずはお互いの自己紹介からにしましょう。私の名前は、菊池貞則（きくちさだのり）といいます」

「菊池さん、ですか……自分は北村純です」

純が名乗ると、菊池は驚いたようだった。すぐに純に尋ねて来る。

「北村さんは、私と同じ皇国の出身ですか？」

皇国、と言われてすぐに何のことかわからなかった。こうこく、広告、公国、皇国と頭の中でようやく正解と思われる変換に辿り着いたところで、応じる。

「ええと、天皇が治める国という意味の皇国ですよね？」

「そうですよ」

「あ、なら日本のことですよね、それならそうです」

随分と古風な言い方をするんだなぁ……と純は思ったものだ。

怪訝な顔をした菊池が何かを言う前に、さらに純は質問した。

「出身を聞くって、ここ日本じゃないんですか、外国だなんて言いませんよね？」

「ここは帝国ですが……」

帝国と言われて、純にはどこの国のことかさっぱりわからなかった。さっきまでは落ち着いていた心が、また不安に揺れ始める。

「そうだ、あの、自分どうしてここにいるんでしょうか。自分、いきなり頭がおかしくなっているとしか思えない女の人に」
「少し待って下さい、順を追って話しましょう」
「は、はい」

勢いに任せて質問を浴びせまくろうとした純を、菊池は片手を上げて制した。
それで純も少しは落ち着き、とにかく事情を知っていそうな菊池の話を待つ。

「北村さんはあのダークエルフの女とどういう関係だったのか、よろしければ教えて欲しいのですが」
「はぁ、ダークエルフって何かの冗談でしょうか……よくわかりませんが、気がついたらいきなり目の前にいて、自分のことをナイフで刺そうとして来たんですよ、狂ってますよ。しかもいきなり燃えてしまったし、なんですかあれ？」

あの時の光景を思い出し、純はまた肝が冷えた。菊池のダークエルフとかいうファンタジックで珍妙な表現も、すぐに頭から消えた。

ふと純は思いついた。実はこれは全部、夢か何かなのではないかと。
あの赤松ともみ合って河口に落ちた自分は意識を失い、誰かに助けられたものの病院のベッドの上にいて、今も夢の世界か……さもなくば、あの世なのかも。

「いっ！？」

純は実に原始的な方法でとりあえず目をこすってみたが、その途端に目に激痛が走って涙が出てきた。

慌てて涙を拭おうとするとさらに痛くなり、結局泣くに任せるしかなかった。
目に何かちくちくしたものが刺さっている感じがしたが、涙を流しているうちに一緒に落ちたようで、ちょっとしてから目を開けることができた。

「大丈夫ですか、でもその手でいきなり目を強くこすったりするからですよ」

机の引き出しから出した薄い布で自分の目元を拭き、涙を拭ってくれた菊池がそんなことを言った。
自分の手は汚れていたのだろう、そう思って右手に視線を落とした自分は、絶句した――茶色の細かい毛に覆われた自分の手を見れば、人は誰しもそうなると思う。

「え、あれ？」

反射的に左手で自分の右手に生えているとしか思えない毛を撫でたが、その左手にも同じ茶色の毛が生えていた。袖をまくってみたが、まくったところまでの腕一面も同様だった。
そこで自分が菊池と同じ着物を着ていることに気がついたが、それどころではなかった。
着物から覗く自分の胸元を見れば、そこにもやはり皮膚は見えず、純白の毛並みだけが見える。

「どうしたんですか、北村さん……？」
「どうしたも何も、ほら、自分の体に動物みたいな毛が生えちゃってるんですよ、明らかにおかしいじゃないですか！？」

躍起になって体のあちこちを探って生えている毛並み、もはや動

物のそれとしか思えないものに触れながら、菊池に訴える。

「そう言われても、あなたは狐の獣人ではありませんか？」

引き出しから新たに出した手鏡を見せながら、菊池が不思議そうに言った。

そこには全身を覆う毛並みと、お尻にあったふわふわの尻尾に気づいて、ぽかんと口を開けた狐の顔がうつっていた――純はそれが自分の姿であると気づいた瞬間、気絶こそしなかったものの、また声の許す限り絶叫していた。

純は恥も外聞も無く、泣きながら菊池に訴えた。自分は人間だったこと、冬の夜に橋から落ちたこと、あの狂った女とのこと、そして今ここに人外としていること。

改めて話してみても、まったく理解不能な事態だった。

泣きながら話している最中、頭にある三角形の耳に触れてみたが、しっかりと触れた感覚があり、やはり鏡の中の狐が自分であることを認めざるを得なかった。

自分が人間ではなく、狐との合の子のような状態になってしまったというのは、純をパニックの只中に突き落とし、泣き喚かさせるだけの衝撃力があった。

「そちらの事情はわかりました、しばらくここで待っていてください」

一通り話し終えると、菊池はそう言って部屋から出て行ってしまう。部屋の外から話し声が聞こえるので、何やら誰かと相談してい

るようだ。

残された純はといえば、落ち着かずにずっと狐の体をいじっては、本物だと実感して気を失いそうになるのを繰り返していた。

手鏡を見ても、明らかに恐慌状態とわかる狐の顔がうつるだけで、純は諦めて菊池が戻るのをただ待つだけにした。

「お待たせしました」

菊池がやっと戻って来た頃には、なんとか純も泣きやんでいた。

「あなたの話を魔法の専門家と検討してみましたが……落ち着いて聞いて下さいね」

「わ、わかりました」

目尻に残った涙をそっと拭ってから、菊池が一体何を言うのか待った。

「――あなたは召喚されたんです、あなたのいた世界からこの世界へと」

純は呆然とした。そしてありえないと脳内で反射的に否定したが、すぐに考え直した。

今の今まで、召喚などというファンタジーなことにまったく考えが及んでいなかったが、確かに召喚という非現実要素がありえるならば、今のこの状況をすべて説明できるような気がしたのだ。

「一体誰が、何の目的で自分を……まさか」

「そうです、あなたが見た頭のおかしい女は、過去の禁じられた魔法に手を出して大きな被害を出し、指名手配されていたダークエル

フです」

召喚の次は、ダークエルフと来て、純はいよいよファンタジーが現実であることを認めなくてはならなくなってきた。

「ダークエルフって、あの耳が尖っていて魔法が上手なエルフの、悪い奴……？」

「大体それで合っていますね。この辺りでは魔女として知られたなかなか有名なダークエルフだったのですが、昨夜ついに居場所を突き止めまして」

どうにも嫌な予感がしたが、黙って菊池の話の続きを聞いた。

「居場所の地下で見つけたので、ばっさりと斬ってしまったわけですが」

「え……いきなり、ですか？」

「大変危険な存在で手間取ったら何をするかわからないので、見つけ次第殺すようにと言われてましたから」

あっさりと菊池は答えた。

いきなり殺すというのもまた衝撃的だが、この穏やかな学者風の菊池が殺しをするような人だとは思えなかったので、そちらの方にも純はかなり衝撃を受けたが。

「それで一撃で深手は負わせたのですが、なんと自殺されてしまいまして」

「あの、一気に全身燃えてしまった？」

「ですね、あっという間でした。それから地下室の奥を調べたところ、気を失っているあなたを見つけたというわけです」

とりあえず今の菊池の話であのひどいホラー映画じみた展開の経緯はわかった。
しかし、純が知りたいことはまだまだある。
「自分が召喚されたということについて、もっと詳しく話を聞きたいんですけど……」
「残った魔法陣や資料から、あの魔女がどうやらまたしても禁じられていた大昔の召喚魔法に手を出していたことがわかりました。そのこととあなたの話を関連付ければ、あなたが異世界から召喚された、という結論に辿り着くわけです」
純はもう納得するしかなかった。
人はあまりにも驚くべきことが連続すると、それに慣れて諦観の境地に達するらしいが、今の純がまさにその状態だった。
自分はあの狂ったダークエルフの女のせいで、この異世界に召喚されたというのが現実のようだ。
「でもどうして人間じゃなくて、こんな狐の体に……元に戻す方法とか、無いんですか？」
「すみません、召喚魔法の重要な部分が記された本は魔女が持っていたようなのですが、一緒に燃えてしまったようで、詳細はまったくわからないんです」
――最悪だ、と純は思った。
「もちろん調べは進めますが、なにしろ古代魔法の一種で謎が多過ぎるので、今のところはあなたが人間の体に戻る、あるいは元の世界に帰還する方法はない、と言わざるをえません」

どうやら最悪の前に、最低という二語も付け加える必要がありそうだった。

異世界召喚（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8900z/

鉄血の狐

2011年12月29日22時47分発行